

夏目漱石

余と万年筆

余と万年筆

このあいだ魯庵君ろあんくんに会ったとき、丸善の店で一日に万年筆が何本ぐらい売れるだろうと尋ねたら、魯庵君は多いときは百本ぐらい出るそうだと答えた。それでは一本の万年筆がどのくらい長く使えるだろう、ときいたら、このあいだ横浜のもので、ペンはまだかなりだが、軸が減ったから軸だけ替えてくれといって持ってきたのがあるが、この人は十三年まえに一本買ったぎりりで、その一本を今日まで絶えず使用していたのだというから、これ

がまあいちばん長い例らしい、と話した。してみると普通の場合では、いくら残酷に使ってもたいてい六、七年の保証はつけられるのが一般の万年筆の運命らしい。一本でそれほど長く使えるものが日に百本も出るといえば万年筆を需用する人の範囲は非常な勢いをもつて広がりがつとあると見ても、まんざら見当ちがいの観察とも言われないようである。もつとも多い中には万年筆道楽というような人があつて、一本を使いきらないうちに飽きがきて、また新しいのを手に入れたくなり、これを手に入れてしばらくすると、また種類のちがった別のものがほ

しくなるといったふうには、それからそれへと各種のペンや軸を試みてうれしがるそうだが、これは今の日本にたくさんありうる道楽とも思えない。西洋ではパイプに好みを持って、大小長短いろいろ取り混ぜた一組をきれいに暖炉の上などに並べて愉快がる人がある。単に蒐集狂という点から見れば、このパイプを飾る人も、盃を寄せる人も、ひょうたんをためる人も、皆同じ興味にかられるので、同種類のものうちで、しろうとにわからないような微妙な差別を鋭敏に感じ分ける比較力の優秀を愛するにすぎない。万年筆狂も性質からいえば多少実用に

近い点で以上と区別のできないこともないが、しいてな
くても済むものを五つも六つも取りそろえるのだから、
今あげた種類の蒐集狂とたいした変わりのあるはずがな
い。ただその数にいたっては、少なくとも目下の日本の
状態では、西洋のパイプ気ちがいの十分の一もなからう
と思う。だから、丸善で売れる一日に百本の万年筆の九
十九本までは、尋常の人間の必要にせまられて机上もし
くはポケット内に備えつける実用品と見てさしつかえ
あるまい。してみると、万年筆が輸入されてから今日ま
でにすでに何年を経過したかわからないが、とにかく高

価の割にはたいへん需要の多いものになりつつあるのは争うべからざる事実のようである。

万年筆の最上等になると、一本で三百円もするのがあるとかという話である。丸善へ取り寄せてあるのでも、すでに六十五円とかいう高価なものがあるとか聞いた。もとより一般の需要は十円内外の低廉な種類に限られていくのだろうが、それにしても、一つ一銭のペンや一本三銭の水筆に比べると何百倍という高価にあたるのだから、それが日に百本も売れる以上は、われわれの購買力がこの便利ではあるがぜいたく品と認めなければならな

いものを愛玩あいがんするに適當なくらい進んできたのか、または座右に欠くべからざる必要品として価の廉不廉にかかわらずちようほうがられるのか、どちらかでなければならぬ。しかし今その原因を一つにかたづけけるのは愚のいたりとして、また事実の許すごとく、しばらく両方の因数が相合してこの需要を引き起こしたとして、余はとくに余の見地から見て、後者のほうに重きを置きたいのである。

自白すると、余は万年筆にあまり深い縁故もなければ、また人に講釈するほどに精通していないしろうとなので

ある。はじめて万年筆を用いだしてからわずか三、四年にしかならないのでも、親しみの薄いことはあきららかにわかる。もつとも、十二年まえに洋行するとき親戚しんせきのものがせんべつとして一本くれたが、それはまだ使わないうちに船のなかで機械体操のまねをしてすぐこわしてしまった。それから外国にいる間は常にペンを使って事を足していたし、帰ってから原稿を書かなくてはならない境遇に置かれても、へたな字をペンでガシガシ書いて済ましていた。それで三、四年まえになってなぜ万年筆に改めようと急に思ったか、その理由は今ちよつと思

い出せないが、第一に便利という実際的な動機に支配されたのは事実にちがいない。万年筆についてなんらの経験もない余は、その時丸善からペリカンと称するのを二本買って帰った。そうして、それをいまだに用いているのである。が、不幸にして余のペリカンに対する感想はなほだよろしくなかった。ペリカンは余の要求しないのにインキをむやみにポタポタ原稿紙の上へ落したり、またはぜひ墨色を出してもらわなければ済まないとき、がんとして要求を拒絶したり、ずいぶん持ち主を虐待した。もつとも、持ち主たる余のほうでも、ペリカンを厚

遇しなかつたかもしれない。無精な余は、インキがなくなるのと、かつてしだいに机の上にあるどんなインキでもかまわずにペリカンの腹の中へつき込んだ。またブリュール・ブラツクの性来きらいな余は、わざわざセピヤ色の墨を買ってきて、遠慮なくペリカンの口を割って飲ました。そのうえ、無経験な余は、いかにペリカンを取り扱ふべきかを解しなかつた。現にペリカンがいかに出洩つても、余はいまだかつてかれを洗たくしたためしがなかつた。それで、ペリカンのほうでも半ば余にあいそをつかし、余のほうでも半ばペリカンを見かぎって、この正

月『彼岸過迄』ひがんすぎまでを筆するときにはまたひと時代退歩して、

ペンとそうしてペン軸の旧弊な昔に逆もどりをした。その時余ははじめて、離別した第一の細君をあとからなつかしく思うごとく、いったん見捨てたペリカンにみれんの残っていることを発見したのである。ただのペンを用い出した余は、インキの切れるたびごとに墨つぼの中へ筆を浸して新たに書き始めるわずらわしさに堪えなかつた。さいわいにして、余の原稿がそれほどの手数が省けたとて早くでき上がる性質のもでもなし、またペンにすれば余の好むセピヤ色で自由に原稿紙をいろどること

ができるので、まあ『彼岸過迄』の完結まではペンで押し通すつもりでいたが、その決心の底にはどうしても多少の負け惜しみがこもっていたようである。

余のごとく機械的の便利にはそれほど重きを置く必要のない原稿ばかり書いているものですら、また買いそこなったか、使いそこなったため、万年筆には多少てこずっているものですら、いよいよ万年筆を全廃するとなるところのくらいの不便を感じるところをもつてみると、その他の人が価のいかんにかかわらず、毛筆を棄てペンを棄ててこっちに向かうのは向かう必要があるからで、財

力ある貴公子や道楽むすこのおもちゃにつごうのいいぜ
いたく品だから売れるのではあるまい。

万年筆の丸善における需要をそう解釈した余は、各種
の万年筆の比較研究やら、ひとつひとつの利害得失やら
について一言の意見を述べることのできないのを、大い
に時勢遅れのごとくに恥じた。酒飲みが酒を解すること
く、筆を執る人が万年筆を解しなければ済まない時期が
来るのは、もう遠いことではなからうと思う。ペリカン
だけの経験で万年筆はだめだというぼくが人から笑われ
るのもまもないこととすれば、ぼくも笑われないために、

少しはほかの万年筆もためしてみる必要があるだろう。現に、この原稿は魯庵君が使ってみるといってわざわざ贈ってくれたオノトで書いたのであるが、たいへん心持よくすらすら書いて愉快であった。ペリカンを追い出した余は、その姉妹にあたるオノトを新しく迎え入れて、それで万年筆に対していくぶんか罪滅ぼしをしたつもりなのである。

日本文学電子図書館

「夏目漱石全集 第3巻」

著 者：夏目漱石

制作者：宮澤一郎

出版社：春陽堂書店

1965年8月31日 初版

日本文学電子図書館